石岡市立ふるさと歴史館
第23回企画展

古墳出現

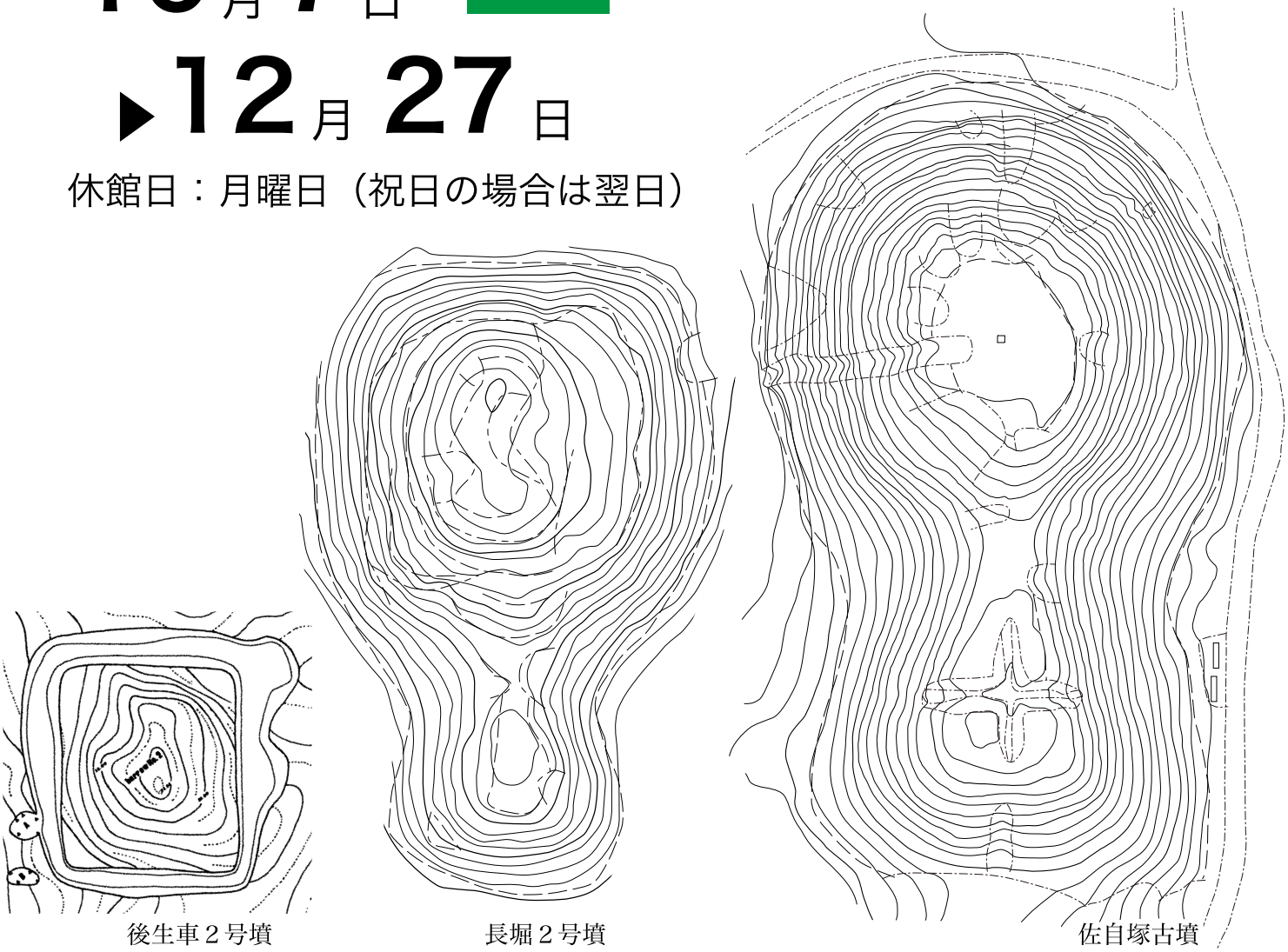
令和２年

10月7日

▶12月27日

入館無料

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）



後生車２号墳　長堀２号墳　佐自塚古墳

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社 1-2-10 石岡小学校敷地内
電話　0299-23-2398

石岡市立ふるさと歴史館 第23回企画展

古墳出現

■目次

はじめに　1
Ⅰ　弥生のムラから古墳のムラへ　2
Ⅱ　王墓の誕生　4
Ⅲ　王の居館　6
Ⅳ　新たな胎動　7
展示品一覧　8

■例言

本冊子は，令和２(2020)年10月７日～12月27日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第23回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の編集・執筆は，石岡市教育委員会 文化振興課（谷仲 俊雄）が行いました。

展示で使用したイラストは，ヨスミナミ氏よりご提供いただきました。

展示にあたっては，以下の文献をはじめ，各発掘調査報告書など多くの文献を参考にいたしました。

稲田健一「古墳時代前期のひたちなか」『ひたちなか埋文だより』42，2015年
茨城県考古学協会『考古学からみる茨城の交易・交流　発表要旨』，2016年
小玉秀成『地方王権の誕生　展示解説書』玉里村立史料館，2004年
小玉秀成『南関東との交流　展示解説書』玉里村立史料館，2008年

■謝辞

以下の方々・機関にご協力いただきました。ありがとうございました。

大熊　久貴　，佐々木　憲一　，ヨスミナミ　，明治大学文学部考古学研究室
「考古学からみる茨城の交易・交流」古墳部会

© ヨスミナミ

古墳出現

「あっ，弥生の土器の上に，土師器の小さな甕がのってみつかったぞ」

外山（とやま）遺跡の発掘調査中，担当者は思わずそう声を上げてしまったと言います。昭和55年，フローラルシティ南台の造成工事に先立つ調査での出来事です。

弥生時代の石岡では，縄目で文様をつけた土器が使われていました。その土器の上に，文様がない古墳時代の土器「土師器（はじき）」がのっていたのです。弥生時代と古墳時代の遭遇（そうぐう）―担当者の混乱と興奮が伝わってきます。

外山遺跡の発掘調査から40年，近年では佐久上（かみ）ノ内（うち）遺跡や弥陀（みだ）ノ台（だい）遺跡（小井戸）などの発掘調査が行われ，弥生時代から古墳時代への移行期の集落の様子や，王の住まいと考えられる「豪族居館」の様子などがわかってきました。

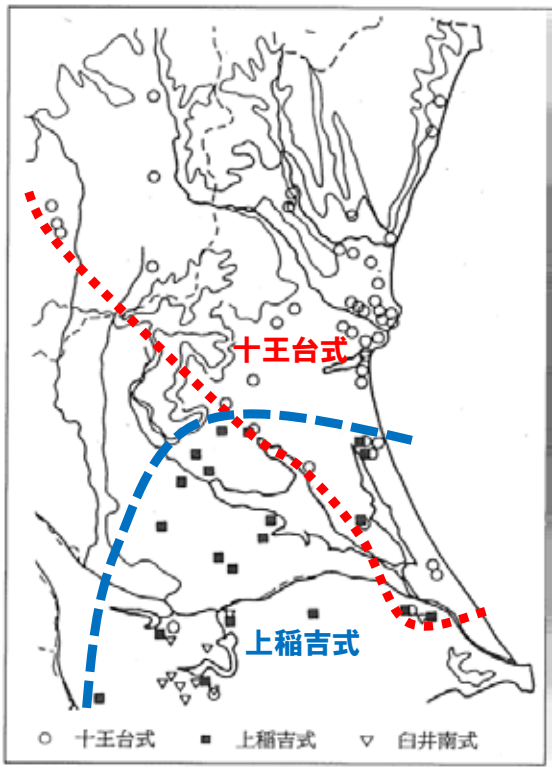
また，柿岡・佐久地区は，丸山古墳や長堀2号墳，佐自塚古墳など古い時期の古墳（前期古墳）が多く存在し，「常陸屈指の前期古墳の集中域」と注目されてきました。近年でも測量調査が行われ，新たな知見が得られています。

今回の企画展では，弥生時代から古墳時代にかけての集落や墳墓の調査成果を紹介するとともに，石岡における「古墳の出現」を考えてみたいと思います。

▲ 長堀2号墳の測量調査の様子（平成21年度）

「弥生土器」と「土師器」の出会い

弥生時代の石岡では，縄目で文様をつけた土器が使われていました。3世紀，弥生時代の最後の頃でも同様で，県南部は口縁部にイボ状の突起がある「上稲吉式」土器，県央部～北部は縦スリットと呼ばれる縦の区画が入る「十王台式」土器が使われていました。「上稲吉式」の土器圏，「十王台式」の土器圏というように，ある程度の地域ごとで土器が違っていることから，その範囲（土器圏）は，交易圏であり，婚姻圏と想像することができます。石岡は，この2つの土器圏のちょうど境界にあたっています。

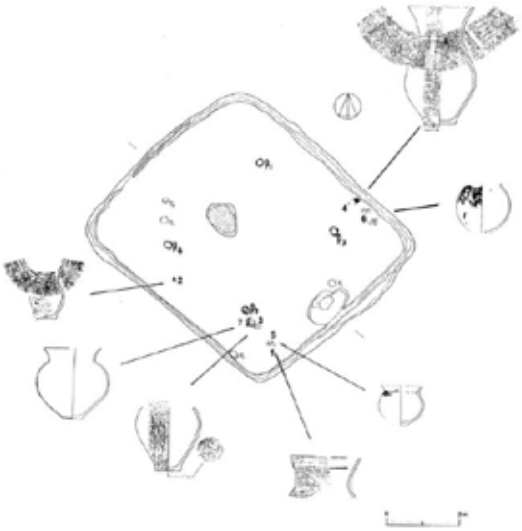


▲弥生時代後期後半の土器の分布
（八郷町史編さん委員会2005『八郷町史』）

外山遺跡（南台）では，弥生時代から古墳時代にかけての集落が発掘されています。十王台式や上稲吉式といった縄文が施された土器のほかに，文様がない壺や高杯，刷毛目という細かな条線が全体に見られる甕が出土しています。これらの土器は地元のものではなく，南関東など他の地域のもので「土師器」と呼ばれる古墳時代の土器に連なるものになります。

土器圏を越えて他地域の土器が出土することはいつの時代でもあります。しかし，外山遺跡の住居跡からは他地域の土器が何個体も，地元の土器と一緒に出土しています。まるで他地域の人が一緒に住んでいたかのようです。

土器圏を交易圏・婚姻圏とすると，その圏外からの人たちが移住してきたということになります。そして，その人たちが鉄器をはじめ先進的な技術・文化―古墳文化を伝えてきたのでしょう。



▲外山遺跡５号住居跡の土器出土状況図
（石岡市教育委員会1995『石岡市の遺跡』）

では，移住者と地元との関係はどうだったのでしょうか。移住者が力づくで征服したのでしょうか。

外山遺跡の住居での土器の出土の様子をみると，出身を異にする人たちが仲良く一緒に住んでいたかのようです。婚姻関係だったのかもしれません。

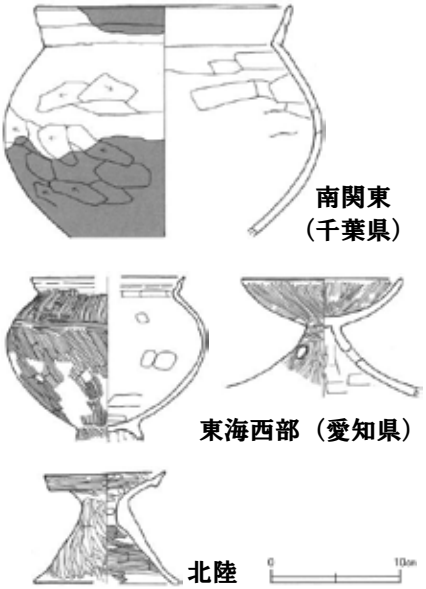
もうひとつ手かがりとなるものに，形は弥生土器ですが，縄目の文様のない壺があります。移住者が土師器の技法で，「弥生土器」を真似て作ったのでしょうか。そこからは移住者が地元に寄り添う様子が浮かんできます。

「弥生土器」と「土師器」の出会い―それは武力による征服ではなく，平和的な融合だったのでしょう。

移住者たちのムラ

外山遺跡で「弥生土器」と「土師器」がともに使用されていた頃や次の段階には，「土師器」が主体の集落も現れます。石岡別所遺跡や二子塚遺跡（染谷）がそうです。そこでは南関東や東海西部，北陸地域に似た土器が出土しています，作り方や形はその地域のものに似ていていても，土器の粘土は違っていたり，デフォルメされていたりで，それぞれの地域の土器そのものではないようです。移住者たちが，出身地の土器を作ったのでしょう。

では，各地域からの移住の背景は何だったのでしょうか。鍵となるのは，「肥沃な低湿地」です。外山遺跡は，山王川という小河川から派生する谷津に面する台地上に立地していました。中小規模な谷津を水田として開発していたのでしょう。洪水への対策や灌漑設備を整える必要がある広い低湿地で水田経営を行う技術はまだなかったのかもしれません。しかしそれは逆に，肥沃な低湿地は手つかずで残っていたと言えます。そこを狙って，南関東をはじめとした地域から集団で移住し，開拓を進めていったのでしょう。また，それだけの集団規模で，先進的な技術や道具を有していたのでしょう。



▲石岡別所遺跡の
他地域に系譜の求められる土器の例
（茨城県教育財団2005『石岡別所遺跡』）

古墳時代のムラ

低湿地の開発が進むと，生産性は飛躍的に上がったのでしょう。集落規模も拡大します。

外山遺跡は，集落のほぼ全域が調査されましたが，一時期の集落は竪穴住居10軒前後。それが園部川を目の前に望む弥陀ノ台遺跡（小井戸）では，道路幅だけの発掘調査にもかかわらず，古墳時代前期の竪穴住居が7軒発見されています。遺跡は調査範囲の外にも広がっていることから，20軒以上からなる集落と予想されます。しかも立地しているのは，北向きの斜面。日当たりが良いとは言えないところです。それよりも園部川沿いの低湿地の開発のための利便性をとったのでしょうか。

低湿地の耕地開発を進めることで生産性は上がり，人口も増えていったのでしょう。そして，それは社会の変革を招き，階層化が進んだのでしょう。弥陀ノ台遺跡の住居には，一辺6mを超える大型でかつ土器の種類や出土量が多いものと，4m程度で土器の出土量が少ないものの２種類がありました。「持てる者」と「持たざる者」，その２者に分かれていたのかもしれません。

▲弥陀ノ台遺跡の発掘調査全景
手前が園部川。標高14～18mの低位段丘上に集落が展開。
（日考研茨城2014『弥陀ノ台遺跡』石岡市教育委員会）

方形周溝墓の出現

階層化の進展の様子は，住居だけではなく，お墓からも読み取ることができます。弥陀ノ台遺跡と園部川を挟んだ対岸の殿畠遺跡（小美玉市宮田）では，「方形周溝墓」というお墓が発掘されています。約10m四方に四角く溝を掘り，その真ん中には埋葬施設が1つ。1人の有力者のためのお墓です。

「方形周溝墓」は，弥生時代に盛んに作られるお墓ですが，茨城県では作られていませんでした。それが3世紀中頃になると突然出現します。移住者たちが先端の技術や道具とともに持ち込んだのでしょう。

方形周溝墓は，石岡市内でも，二子塚遺跡や後生車古墳群（染谷），舟塚山古墳群（高浜）で発見されています。低湿地の開発を成功させた者，あるいは，移動が活発化するなかで水上交通や物流ネットワークの拠点を治めた者，そんなこの地域で最初の有力者たちが眠っているのでしょう。

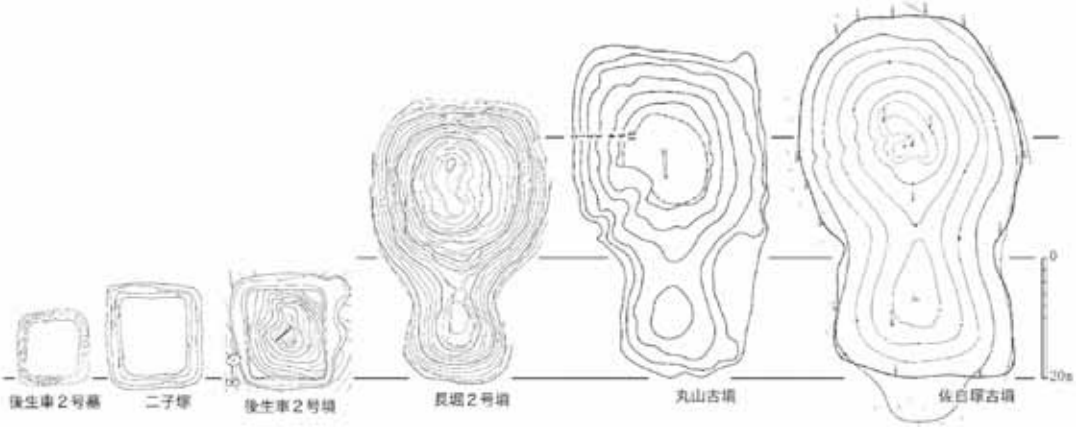
▲殿畠遺跡（上）と二子塚遺跡（下）の方形周溝墓
（茨城県教育財団2017『殿畠遺跡』）

古墳の出現

方形周溝墓の出現から少し後の西暦300年頃，石岡市にも高く土を盛り上げたお墓「古墳」が出現します。方形周溝墓も，周囲の溝の掘削土が盛り上げられていましたが，その高さは1～2m程度だったようです。古墳は，溝の掘削土のほかに，運んできた土が盛られています。

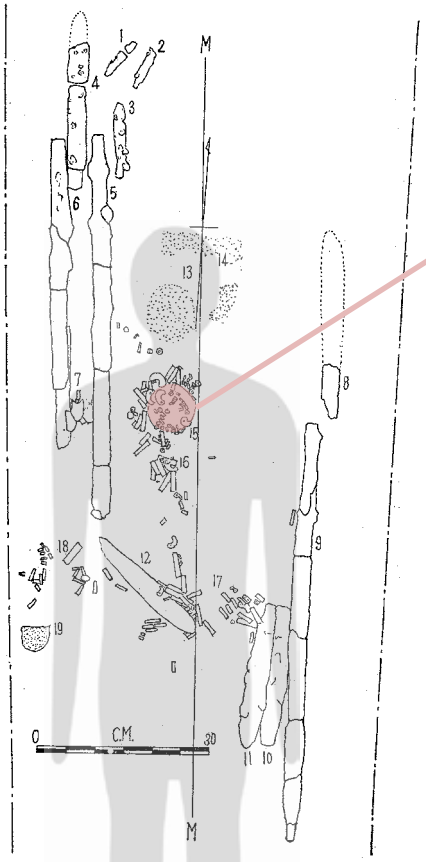
石岡市で一番古い古墳と考えられている丸山古墳（柿岡）の高さは6mほど。そのほとんどが盛り土によって造られていると考えられます。また，大きさも55mほどですので，方形周溝墓より，格段と労力をかけたお墓であることがわかります。そして，埋葬されたのは，中心に1人だけ。しかも，銅鏡や鉄剣・槍，勾玉など貴重な品々が副葬されていました。「王」と呼ばれるような人物が埋葬されていたのでしょう。

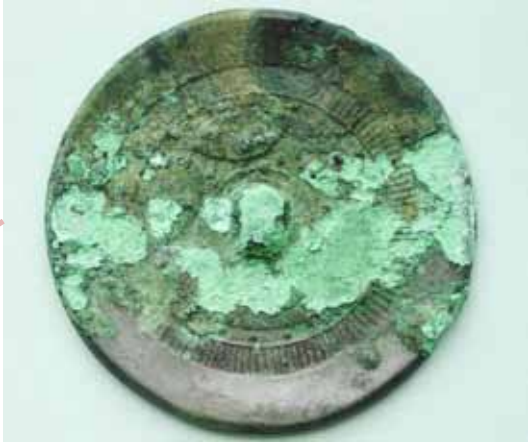
しかも形は，方形に細長い部分がついた「前方後方墳」。ヤマト政権の大王墓である「前方後円墳」と関係をもった，まさしく「王墓」の誕生です。



▲古墳と方形周溝墓

丸山古墳の副葬品





丸山古墳からは，青銅製の鏡や鏃，勾玉のほか，鉄刀や鉄槍，管玉，ガラス小玉が出土しています。左の13のあたりに骨粉がまとまっていたことから，頭骨があったと考えられます。北枕で埋葬され，胸の上に鏡が，左右両側には刀や槍が並べられていたようです。玉類は，もとは首飾りだったと考えられますが，バラバラに散らばっていることから，埋葬するときにわざと玉の緒（ひも）を切り離したのでしょう。

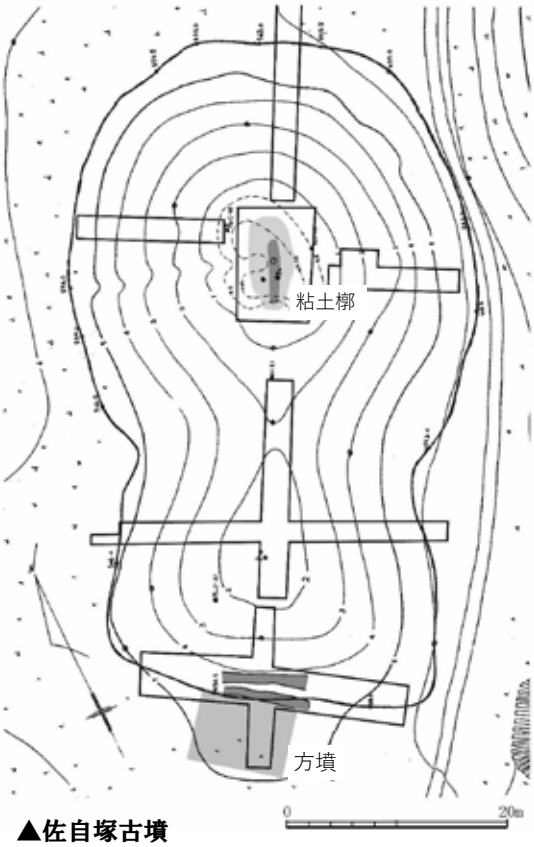
鉄刀や鉄槍は，石岡市中央公民館で展示しています。

佐自塚古墳

佐自塚（さじづか）古墳（佐久）は，丸山古墳に続く「王墓」で，石岡市で最も古い前方後円墳です。埋葬施設は，木棺を粘土でくるんだ粘土槨（ねんどかく）。木棺の全長は6mを超える長大なものでした。「前方後円墳」という形はもちろん，古墳の規模や高さ，埋葬施設からは，丸山古墳よりもさらに力を伸ばした「王」の姿が想像できます。

しかし，副葬されていたのは，竹櫛（たけぐし）や刀子，勾玉，ブレスレットと考えられる玉類だけ。丸山古墳のような鏡はもちろん，武器類もありませんでした。古墳や埋葬施設の立派さと対照的な副葬品の少なさ—そこに佐自塚古墳の「王」の実像を探るヒントがあるのかもしれません。

ところで，佐自塚古墳の前方部には「方墳」が接して造られています。このような例は，香川県の古墳の一部や大阪府松岳山（まつおかやま）古墳に見られます。佐自塚古墳と松岳山古墳は墳丘の形も似ていることから，佐自塚古墳の「王」は松岳山古墳の「王」と密接な関係にあったのかもしれません。



▲佐自塚古墳

佐自塚古墳と佐久上ノ内遺跡

古墳に埋葬される「王」は，どこに住んでいたのでしょうか。それを解く手がかりが，佐自塚古墳近くの佐久上ノ内遺跡で見つかっています。

平成25年，農道建設に伴い発掘調査を行ったところ，幅3m前後で深さ1mほどある古墳時代前期の溝を発見しました。発掘できたのは東西方向と南北方向の一部でしたが，航空写真を見ると，東西方向の溝の延長線上に黒い部分が続き，そして南に向かって直角に曲がっています。この黒い部分は，考古学ではソイルマークと呼ばれるもので，地下に遺跡があるために土壌の乾燥状態が異なり，それが反映されたものと考えられます。

▲遺跡の航空写真（写真上が北）
溝の延長線上に黒い部分が続いている。

このソイルマークを参考にすると，東西70m，南北50m以上の範囲を溝が堀のように方形に囲んでいたことになります。このような溝―堀の区画は古墳時代の一般集落では珍しいもので，王が住んでいた「居館」の可能性が高く，石岡市では初めての発見になります。

佐自塚古墳では，埋葬施設の上から高杯と呼ばれる土器が出土しています。土器の形や，出土した場所を考えると，埋葬時にお供えをしたときのものと考えられます。

一方，佐久上ノ内遺跡の溝底からは，古墳時代前期の土器がまとまって出土しました。また，上層からは古墳時代中期の土器が出土しています。したがって，古墳時代前期に溝が掘られ，中期には埋まったと考えることができます。佐自塚古墳の土器の年代は，溝の下層土器と上層土器の間に位置づけられるものでした。

つまり，佐自塚古墳で埋葬が行われ，お供えをしたときに佐久上ノ内遺跡の溝は機能していて，被葬者の活動時期は溝―居館の存続時期と重複することになります。そして，佐自塚古墳と佐久上ノ内遺跡の距離が，わずか700mということを考えると，佐自塚古墳の被葬者―王の居館こそが佐久上ノ内遺跡と特定することも可能となります。

古墳から被葬者の名前を書いた墓誌が出土することはごく一部の新しい古墳を除いてないため，被葬者が誰なのか，どこに住んでいたのかを知ることは非常に難しい問題です。佐自塚古墳と佐久上ノ内遺跡は，考古学的な所見から，古墳と居館のセット関係がわかる極めて貴重な事例と言えます。

舟塚山古墳体制へ

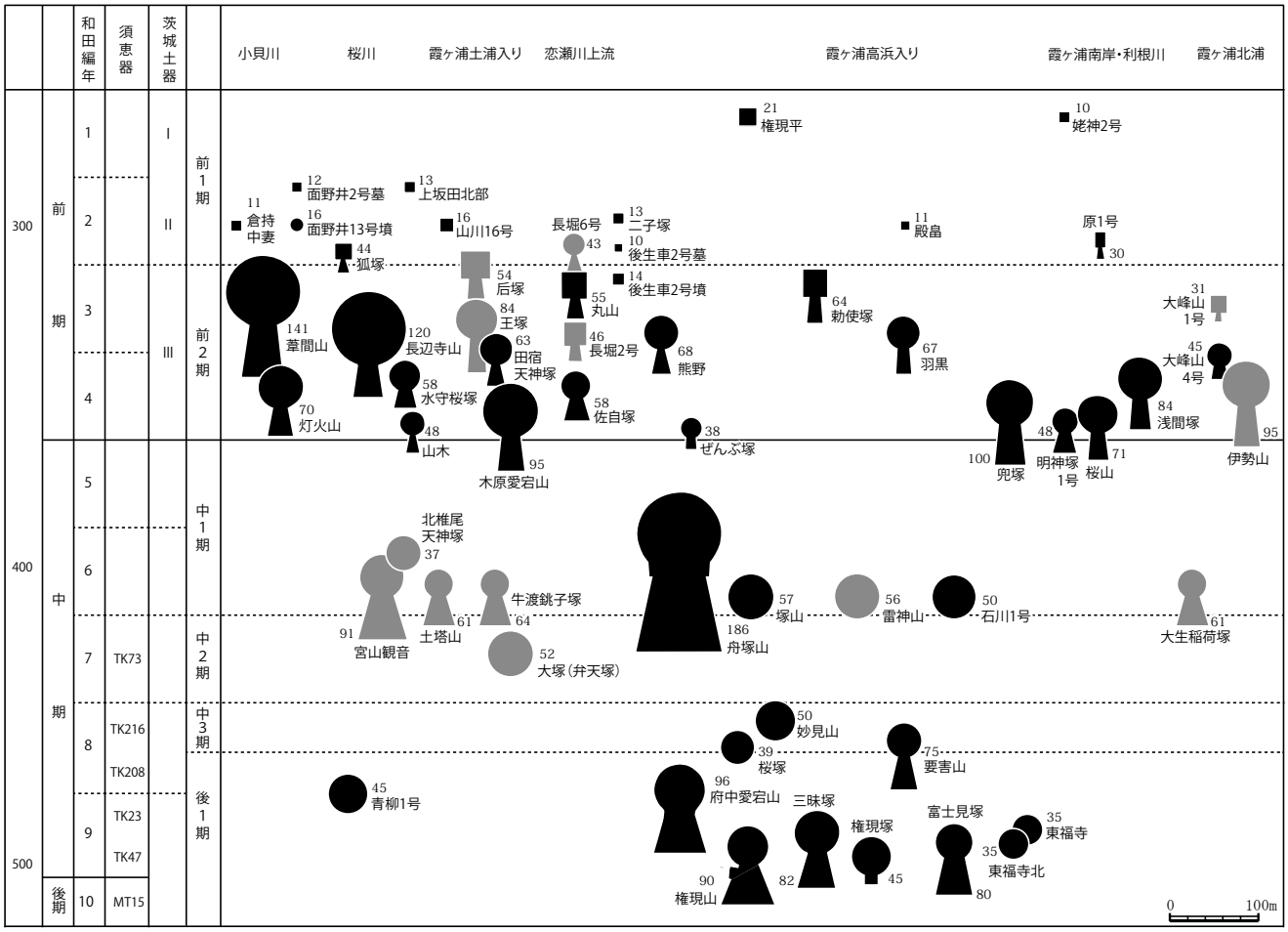
佐久上ノ内遺跡の居館の溝が埋まった頃，古墳築造の状況は一変します。それまでは丸山古墳や佐自塚古墳のように恋瀬川上流の柿岡・佐久地区で盛んに築造されていましたが，入れ替わるように下流の高浜地区に「舟塚山古墳」が出現します。西暦400年頃の出来事です。

墳丘長186mという佐自塚古墳の3倍以上になる舟塚山古墳の規模はもちろん，注目されるのは同じ時期の前方後円墳が限られる点です。しかもその限られた前方後円墳は，舟塚山古墳を縮小した形（「舟塚山型」）をしています。その範囲は霞ヶ浦・利根川を介し，千葉県北部にまで広がります。舟塚山古墳を頂点とした広域な政治的結合「舟塚山古墳体制」です。

また，時を同じくして，集落も低地に移っていく傾向があります。「肥沃な低湿地」の開発がいっそう進んだのでしょう。

「弥生土器」と「土師器」の出会いから約150年，古墳時代がまた新たな段階へと進んでいきます。

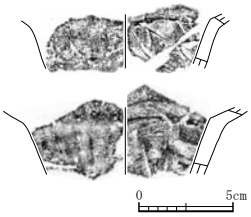
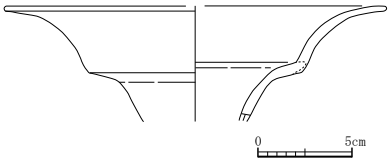
▲「舟塚山型」の前方後円墳とその分布
（谷仲俊雄2020「舟塚山古墳と常陸南部の中期古墳」『古代文化』72-2）



▲常陸南部における主要古墳の変遷

展 示 品 一 覧

	展示品名	遺跡名	時　期	写　真・図　面	所有者
1	弥生土器・土師器	外山遺跡 第5号住居跡	古墳時代前期		石岡市教育委員会
1	弥生土器・土師器	外山遺跡 第26号住居跡 第52号住居跡	古墳時代前期		石岡市教育委員会
2	弥生土器・土師器	石岡別所遺跡 第1号住居跡	古墳時代前期		石岡市教育委員会
3	土師器・石器	石岡別所遺跡 第12A住居跡	古墳時代前期		石岡市教育委員会
4	土師器	常陸国府 S45年発掘 住居址	古墳時代前期		石岡市教育委員会
5	土師器	東大橋原遺跡 第2次 A-K1号住居跡	古墳時代前期		石岡市教育委員会
6	土師器	弥陀ノ台遺跡 SI03・SI04・SI07・ SI18・SI24	古墳時代前期		石岡市教育委員会

7	土師器	二子塚遺跡 1号周溝墓	古墳時代前期		石岡市教育委員会
8	水銀朱	丸山古墳	古墳時代前期		石岡市教育委員会
9	土師器	長堀2号墳	古墳時代前期		石岡市教育委員会
10	土師器	長堀6号墳	古墳時代前期		石岡市 教育委員会
11	土師器	佐久上ノ内遺跡 1号溝	古墳時代 前期・中期		石岡市教育委員会
12	円筒棺	舟塚山古墳	古墳時代中期		石岡市教育委員会

石岡市立ふるさと歴史館第23回企画展

古墳出現

令和２年10月７日発行

編集・発行
石岡市教育委員会　文化振興課
〒315-0195　石岡市柿岡5680-1
TEL　0299-43-1111
石岡市立ふるさと歴史館
〒315-0016　石岡市総社1-2-10
TEL　0299-23-2398